

# 序

## 所長 宮村 達男

国立感染症研究所は一貫して変わらぬ設立理念を持つ。即ち、感染症を制圧し、国民の保健医療の向上を図る予防医学の立場から感染症に関する研究を先導的、独創的かつ総合的に、科学的根拠に基づいて国の保健医療行政に積極的に提言し、支援することにある。具体的には (i) 感染症のレファレンス、サーベイランス業務、(ii) ナショナルコントロールラボラトリーとして生物学的製剤等の品質管理業務を担う。この二つの機能を根本的に支えるには高いレベルの基礎研究が必須である。この基礎研究は感染症の予防、診断、治療に間接的、直接的に深くかかわる応用的な側面が特に強調される。しかも厚生労働省傘下のナショナルセンターが次々に独立法人化してゆくなか、感染研はその使命から国立研究所としての立場を堅持してゆかねばならない。

2009年は感染研が日頃蓄えた力と内外との連携をもってわが国の感染症コントロールに先導的な役割を果たすことが期待され、それに応え、また課題も浮き彫りになった激動の一年であった。4月にメキシコに端を発した (H1N1) 2009 インフルエンザパンデミックには足踏して間もないインフルエンザウイルス研究センターと感染症情報センターを両輪として全所を挙げて対応した。昨年度から準備された新型インフルエンザ発生に対する所内対応のための検査対応、疫学情報等ワーキンググループが直ちに作動した。US CDCから提供された新型ウイルスの遺伝子情報をもとにセンターで緊急に開発されたウイルス診断システムを利用し、全国の検体について24時間体制をしいて確認診断がなされた。各部、室はそれぞれの持ち場で協力し、バイオリスク委員会、動物委員会等各種所内委員会がこの危機管理、対応に力を発揮した。文字通り所を挙げての対応であった。また各地の地方衛生研究所を核とする国内のネットワークにおける普段からの連携が十分に発揮された。また、新型ワクチンの国家検定が所内の連携のもとにおこなわれ、一方、ワクチンの緊急輸入に関して、承認前試験、安全性・有効性の検証、評価、審査に参画、生物学的製剤規準の策定、国家検定等を行った。

感染研の細菌部、ウイルス部など病原体ごとの部、センターを縦糸とすれば、免疫部、病理部などの研究部門を横糸とする仕組みは感染研のかけがえのない財産である。今回のインフルエンザ対応について、所を横断するプロジェクトチームが形成され、インフルエンザウイルスの遺伝子診断、新たな迅速診断系の開発等に対応したことは感染研の底力を示す。また感染研

のもう一つの財産は営々として築き上げた国際連携である。インフルエンザウイルス研究センターはWHOのcollaborative centreとして、世界の最新情報を得、グローバルなウイルス診断に貢献するとともに、WHOの世界対応の戦略確立に寄与した。

一方で、膨大に増加する研究業務量に対する一律の定員削減、諸方面との合意を得ての村山BSL4施設の本格的稼働、本省とのより緊密な連携、リアルタイムに国際対応できるオペレーションルームの建設など数々の課題を残した。

インフルエンザ対応で騒然とすることなく、所全体としては一方で厚生労働科学研究事業「肝炎等克服緊急対策研究事業」「新型インフルエンザ等新興、再興感染症研究事業」を筆頭に文科省等の科学研究費が得られ、国の施策に必要なエビデンスを提供する、地に足をじっくり据えた感染症研究がすすんだ。本年度は500編を超える論文が誌上発表された。各部の中で仕事が完結し、業績としてまとまったケース、感染研の中で部をまたがって横断的な仕事が実を結んだケース、国際協力の結果として結実したケースなど感染研の特徴が目に見える論文が増えた。感染研の積極的な提言が適宜実を結ぶためには、感染研の個々の研究者がそれぞれの学界において、信頼される実績を普段から積み重ねておかねばならない。3月には平成21年度日本細菌学会浅川賞を「病原細菌の病原性遺伝子群の発現調節と病因に関する研究」において副所長(細菌第一部長) 渡邊治雄が受賞した。

人事面では4月1日ウイルス第三部長田代真人がインフルエンザウイルス研究センター長に配置換(インフルエンザウイルス研究センターの新しい人員配置、採用は〔Ⅲ. 調査研究22.インフルエンザウイルス研究センター〕に詳述)、7月1日竹田誠がウイルス第三部長(九州大学より)に着任した。4月1日森修一(福島県立医科大より)が、7月1日星野仁彦(米国ニューヨーク大より)がそれぞれハンセン病研究センター感染制御部の第七室長、第六室長に採用された。6月1日米国ラホヤアレルギー免疫研究所の金城雄樹が生物活性物質部第三室長に採用された。国際協力室長中嶋健介は8月1日厚労省結核感染症課に転出、同日国立長寿医療センターから谷伸悦が着任した。6月30日ウイルス第三部第四室長田口文広が日本獣医生命科学大へ転出のため、6月30日、免疫部第四室長大原直也が岡山大へ転出のため、7月31日、エイズ研究センター第一研究グループ長梁明秀が横浜市大へ転出のため、3月31日エ

エイズ研究センター長山本直樹がシンガポール大学へ転出のため、ウイルス第二部第四室長鈴木哲郎が浜松医大へ転出のため、それぞれ退職した。

また3月31日、所長宮村達男、病原体ゲノム解析研究センター長神田忠仁、エイズ研究センター第一室長武部豊が定年によりそれぞれ退職した。研究所は「人」で持つ。感染研で働いたことが誇りだ、とそれぞれが自信を持って言える研究所に発展してゆくことを願う。